



Title	ソ連トルコ学研究管見
Author(s)	村山, 七郎
Citation	スラヴ研究, 4, 105-111
Issue Date	1960
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/4950
Type	bulletin (article)
File Information	KJ00000113148.pdf



[Instructions for use](#)

ソ連トルコ学研究管見

村 山 七 郎

ソ連邦は多民族国家と言われ、計120以上の民族および小民族^{ナツイヤ}がいるが、大きく見て、スラブ族（大ロシア人、小ロシア人、白ロシア人）が大部分（約70パーセント）で、次に多いのがトルコ族（約8パーセント余）である。その他の民族は数的に（また、おそらく政治的に）トルコ族よりはるかに劣っている。

ソ連邦は15の連邦構成共和国からなり立っているが、このうち5つがトルコ系言語を国語とする下記共和国である（括弧内に、1959年1月15日に施行された全連邦人口調査の結果を示しておく。ただしその数字は必ずしもトルコ人の数を反映するものでない。最近はかなり多くのロシア人がこれらの共和国に入りこんでいる。ロシア人は主として都会に住んでいる。）

アゼルバイジャン共和国 (3,700,000人)

カザフ共和国 (9,301,000人)

キルギース共和国 (2,063,000人)

トルクメン共和国 (1,520,000人)

ウズベク共和国 (8,113,000人)

さらに5つのトルコ民族の自治共和国（タタール、バシキル、チュワシ、カラ・カルパク、ヤクート）と3つの自治州（アルタイ、ハカス、トゥワ）がある。

トルコ系の諸言語は、丁度、インドゲルマン語族の中のラテン系言語（イタリア語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語など）やスラヴ系言語（ロシア語、ポーランド語、ブルガリア語など）と同じように、はなはだしく分化していないので、東トルケスタンからバルカンまでひろがるトルコ人たちは、各自の方言を用いて相互了解が可能であるといわれる。外国人が1つのトルコ方言を知っていれば、バルカンから東トルケスタンまで苦労なくトルコ人の間を旅行できるといわれる。東トルケスタンのカシュガル生まれの東京在住のウイグル人トクタバイ氏はイスタンブールから赴任してきた東京渋谷大山町トルコ小学校長ウンガン先生と、おたがいの言葉を用いて了解し合っているのを見てわれわれは右のことが真実であることを納得する。

トルコ系言語の中で他から大きく離れているのはソ連邦内で行なわれているヤクート語とチュワシ語である。さらにマールフの調査した甘粛省に行なわれる黄ウイグル語も形態学上きわ立った特徴をもっている。黄ウイグル語を除いてすべてのトルコ語において、動詞活用において人称接辞が付せられる。黄ウイグル語の過去形は次のようにしてつくられる。men pilti「私知った」、sen pilti「君知った」、ol pilti「彼知った」、mis pilti「われわれ知った」。(マールフ「黄ウイグル語」、アルマ・アタ1957年、6頁による。) これらの諸形はトルコ共和国トルコ語では ben bildi-m, sen bildi-n, o bildi, biz bildi-k

であって、その他のトルコ方言でも大体これとひとしい。これまで外国でも、わが国でも、動詞活用において人称接辞をとるアルタイ系言語としてトルコ語、ツングース語があげられ、それをとらない言語として蒙古語、満洲語、朝鮮語があげられてきたが、これからは後者の中にトルコ系黄ウイグル語をも加えなければならない。マールーフは「黄ウイグル語が、少数の古代トルコ諸語の1つであると思う」と述べ(6頁)、また「黄ウイグル人の言語における『非人称』活用がかなり古い現象であり、いずれにせよ、人称活用に先行する古い現象であると考えられることができると思う」とのべ(7頁)、「古代トルコ語記録」(Памятники древнетюркской письменности, М.-Л. 1951)(7頁)に示しているトルコ語分類では、ブルガル語、チュワシ語、ヤクート語とならんで黄ウイグル語を「最古のトルコ語」の中に加えている。トルコ諸語はおたがいに割合近いと言っても、多かれ少なかれ方言的差異があることは言うまでもない。しかし、前記の5つのトルコ人共和国に5つの国語を定めなければならない必要があるかどうかは疑わしいとされ、トルコ人の有識者の間に、このことをもって、ポリシェヴィキが Divide et impera の原則を適用したと主張するものがあることを述べおてく。

帝制時代において、トルコ諸民族の言語に対するロシア言語学者の関心が強くなり、前世紀の半ばに近代的トルコ学の土台がロシアのサンスクリット学者ベートルリンク(O. N. Böhtlingk 1815-1904)によって置かれた。彼はパーニニの古代インド語文法を完全な形で出版し(1839—40年)、またロートとともに編さんしたサンスクリット辞典(Sanskrit-Wörterbuch. 7 Bde. 1855-75)によって、古代インド語研究にきわめて大きな貢献をしたので有名であるが、サンスクリットとは全く系統の異なる言語、すなわちヤクート語をも研究し、「ヤクート人の言語について」(Ueber die Sprache der Jakuten. Petersburg 1851)を公表した。帝制時代のトルコ学者として最も有名となつたラドロフは、後にのべる「北方トルコ諸語音声学」の序文の中で、ベートルリンクのこの著書の画期的意義について次のようにのべている。「この研究は、トルコ諸語の文法的研究にとって画期的な著作と目されなければならない。それは私の言語研究において指針として役立つ。私は、私の著書がベートルリンクの著書の継続だと考えている。」

ベートルリンクから研究の方法を学んだラドロフは、きわめて多くのトルコ諸語をみずから踏査し、龐大な資料を自由に使って、トルコ諸語を1つの体系にまとめあげようとした。そこで彼は「北方トルコ諸語比較文法」を計画し、その第1部として、「北方トルコ語音声学」(W. Radloff. Vergleichende Grammatik der nördlichen Türkischen Sprachen. Erster Teil, Phonetik der nördlichen Türkischen Sprachen. Leipzig 1882)を公表した。この中でラドロフは、はじめてトルコ諸語の分類を行なっている(トルコ語の分類はロシアの学者コルシ、サモイロウイチ、ボゴロディツキー、ポッペ、マールーフ、フィンランドの学者ラムステット、ハンガリーの学者リゲティによっても行なわれて^註いる)。また生き

(註) 最近はず連のバスカコフも分類を試みている。H. A. Баскаков. Классификация тюркских языков в связи с исторической периодизацией их развития и формирования, «Труды Института Языкознания АН СССР», 1952, Т. I. ラムステットの分類は、死後、ペンティ・アールトの手で発行された「アルタイ比較言語学概論」第1部(ヘルシンキ1957年)(20—25頁)にも見られる。

たトルコ語および過去のトルコ語の、当時知られていたすべての資料を調査してまとめ上げたトルコ諸方言辞典 (Versuch eines Wörterbuches der Türk-Dialekte, St. Petersburg 1893-1906) は、今なおトルコ学界において、さんぜんたる光をはなち、研究者の不可欠の伴侶となつている (ウィースバーデン市ハラソウィツ書店発行の東洋学関係文献目録, 1959年夏, によると, この入手困難な辞典の複製が割安で出版された)。

ラドロフは古代トルコ語の研究においても大きな貢献をしている。中でもオルホン河畔で発見された突厥碑文の豪華な写真版を出したことは、トルコ学界にとって大きな貢献であった (Радлов В. В. Труды Орхонской экспедиции. Атлас Древности Монголии. Atlas der Altertümer der Mongolei. Спб. 1892 и сл.). しかし、これは同じ年にフィンランドから出たもの (Inscriptions de l'Orkhon recueillies par l'expédition finnoise 1890, et publiées par la Société Finno-Ougrienne. Helsingfors 1892) に比し、精密さが劣るとされる。ラドロフが故意に手を加えたと思われる箇所があるとされている。そして、突厥字の解説は、恐らくその手前まで行っていたラドロフの手によってでなく、それまでトルコ語研究者としては殆んど知られていなかったデンマルクのトムセン (ゲルマン学, スラヴ学, フィノ・ウグル学者) の手によって行なわれたのであった (Vilhelm Thomsen. Déchiffrement des inscriptions de l'Orkhon et de l'Iénissei. Notice préliminaire, Oversigt over det kgl. Danske Videnskabernes Selskabs Forhandlingar 1893, S.285-302. 後にトムセンは次の著書において、解説を詳細に説明した。Inscriptions de l'Orkhon déchiffrées. Mémoires de la Société Finno-Ougrienne, Bd. 5, Helsingfors 1896.)

ラドロフとならんで、カザン大学の N. F. カターノフ教授 (トルコ系ハカス人) の「ウリャンハイ語の研究」(Н. Ф. Катанов. Опыт исследования урянхайского языка. Казань 1903) (ウリャンハイ語は現在のトゥワ語) はウリャンハイ語を、当時知られていたすべてのトルコ諸語と比較したもので、832頁におよぶ大著であり、ロシア・トルコ学の記念碑的存在である。

次に、厳密な方法論者であったペテルブルグ大学教授メリオランスキー (1868—1909年) は現代語研究では「カザク・キルギース語文法概要」(I, II) (П. М. Мелиоранский. Краткая грамматика казак-киргизского языка, ч. 1-2, (Спб, 1894-97) を発表し、また古代語研究では「トルコ語に関するアラブ文献学者」(Араб филолог о турецком языке. Спб. 1900) を発表している。またカターノフよりずっと後ではあるが、カザン大学のボゴロディツキー (1857—1941) (インドゲルマン比較言語学, スラヴ学, トルコ学) にも優れたトルコ学方面の業績がある。なかんずく、「タタール及びトルコ言語学研究」, 「タタール言語学概論」が有名である (В. А. Богородицкий. Этюды по татарскому и тюркскому языкознанию. Казань 1933; Введение в татарскому языкознанию. Казань 1934)。

トルコ諸語の中で独特な地位を占め、比較アルタイ言語学上多くの注目をひいているチュワシ語に関するアシュマリンの研究も有名である (Н. Ашмарин. Материалы для исследования чувашского языка. Казань 1898; Словарь чувашского языка. Вып.

I—III Казань 1910-1912, вып. III—XVII Чебоксары 1928-1950.)

他の学問の領域と同じように、トルコ学の方面でも、革命前からの学者と革命後の学者とを截然と分つことはできない。ボゴロディツキー、アシュマリン、マーロフなどその好例である。帝制時代のトルコ学者の中で最もきわ立っていたラドロフを承けつぐトルコ学者と言え、まずマーロフ(1880—)を挙げなければならない。彼の古代トルコ語に関する研究は前掲の「古代トルコ語記録」に集められており、現代語研究の方面にかかる彼の研究としては比較的最近に出した「ウイグル語、ハミ方言」(Уйгурский язык. Хамийское наречие. М.-Л. 1954)と「黄ウイグル語(Язык желтых уйгуров. Алма-Ата, 1957)をあげることができる。しかしマーロフは、トルコ諸語の比較的、言語学的研究という点では、その師ラドロフを凌ぐことができなかった。たとえば、一例としてラドロフのトルコ語分類とマーロフのそれと比較して見ただけでも、そのことがわかる。比較研究においてラドロフを承けついだ学者はドミトリエフ(1898—1957?)である。彼はバシキル語、アゼルバイジャン語、トルクメン語、タタール語、クムイク語、ガガウズ語、トルコ共和国トルコ語などを研究し、「クムイク語文法」(1940年)、「バシキル語文法」(1948年)は有名である。また古くから外国でも研究を発表している(N. K. Dmitriev. Etude sur la phonétique bachkire, Journal Asiatique, Paris 1927: 193-252; Turkmenische Lieder, Islamica 6: 112-130; *Th* in the modern Turkish languages, Le monde oriental, Uppsala 23: 40-7). 晩年に彼が編集し、自からも多くの論文を寄せている「トルコ諸語比較文法研究」第1部音声学、第2部形態学(Исследования по сравнительной грамматике тюркских языков, I. Фонетика, М. 1955; II. Морфология, М. 1956)は最近のソ連のトルコ学の成果の総決算をしようとしたもので、多くの新しい資料が提供されている(ついでながら、西欧側のトルコ学者も協力して Fundamenta Philologiae Turcicae. Edd. J. Deny, K. Grønbech, H. Scheel, Z. V. Togan を出すことになり、第1巻が1959年出たという。ハラソウィツ書店の前記目録、64頁による)。その後まもなく、ドミトリエフは死去したようであるが、これはソ連トルコ学にとって大きな損失である。

ソ連のトルコ学研究についてのべる場合に逸することのできない学者は天才的な日本語学者、トルコ学者ポリヴァーノフ(Е. Д. Поливанов)である。彼は1914年日本に来て諸方言を研究し、数多くの日本語関係論文を発表したが、早くも1924年に原始トルコ語における長母音が存在したことを証明し(К вопросу об обще-турецкой долготе гласных, «Бюлл. 1-го Средне-Азиатского гос. ун-та», № 6, 1924, стр. 157)フィンランドのレセネン、ハンガリーのリゲティの先をこしていた(この問題については、M. Räsänen. Materialien zur Lautgeschichte der türkischen Sprachen. Helsinki 1949, S. 65 参照)。後にポリヴァーノフは「原始トルコ語における長母音の問題について」(К вопросу о долгих гласных в обще-турецком праязыке, «Докл. АН СССР», В, № 7, 1927, стр. 151-153)で再びこの問題を取り上げている。またポリヴァーノフはウズベク語の研究をも発表している(Введение в изучение узбекского языка. I. Ташкент 1925; Краткий русско-узбекский словарь. Ташкент-Москва 1926)。

現在、ソ連にはトルコ諸語研究の分野で次のような優れた研究家がいる（括弧内に専門分野を示す）。

- ウブリャートワ・E. I. (ヤクート語)
- ハリトーノフ・L. N. (ヤクート語)
- エゴーロフ・V. G. (チュワシ語)
- ゴルスキー・S. P. (チュワシ語)
- バスカコフ・N. A. (カラ・カルパク語)
- パリムバフ・A. A. (トゥワ語)
- サルトバエフ・K. K. (キルギース語)
- セヴォルチャン・E. V. (トルコ共和国トルコ語)
- コノノフ A. N. (トルコ共和国トルコ語)

その他、若い研究家が多くおり、研究者の数からいえば、ソ連は他の国をはるかに凌いでいる。

革命前と革命後のトルコ学を比較して見ると、革命後は古代語の研究の比重が減っていることに気づかれる。古代語に通じていたトルコ学者は革命以前はかなりいた（ラドロフ、メリオランスキー、サモイロウィチ、マーロフ、コトウィチ、ウラジーミルツォフら）が、今では、マーロフ以外あまり多くないであろう。その代り、現代語の研究においては革命前に比して大きな躍進が見られる（ドイツのトルコ学研究の大半がトゥルフアン文書の研究にあることと対比される）。第2に注目されることは、トルコ民族出身の研究者が増大していることである。革命前はアゼルバイジャン人 A. カゼムベクとハカス人 N. F. カターノフのほかにはトルコ民族出身のトルコ語研究者は少なかったが、現在では5つの連邦共和国と5つの自治共和国の学術機関で多数のトルコ語研究者が養成されている。注意をひく第3の点はトルコ学者が啓蒙・教育文化の実際活動と密接に結びついていることである。革命前のロシア・トルコ諸民族は中世紀的イスラム的世界の中に生きていたが、革命によって、啓蒙と科学、工業化と機械化農業がトルコ諸民族の中におしよせてきたとき、トルコ語音韻をきわめて不完全にしか表現できなかったアラビア文字を能率的なローマ字と換え（後に、1939—40年にロシア文字に改められた）、正書法を確立し、生活の革新とともに日々に作り出されねばならない術語をつくり出し、トルコ諸語・ロシア語辞典（およびロシア・トルコ諸語辞典）や各種術語辞典をつくることなど、無数の実生活と結びついた仕事がトルコ学者に課された。これは革命前のトルコ学者の夢もしなかった課題であった。

このように、現代語の研究が盛んになり、また単に現代語を研究するだけでなくそれを形成しようとする努力が払われていること、トルコ民族出身の研究者が多くなり、実生活と言語研究との関係が深まったことはソヴィエト時代のトルコ学の特徴である。しかし他方、かつてラドロフが『北方トルコ諸語音声学』(1882年)や戦後、フィンランドのトルコ学者レセネンが試みたような総括的な研究(M. Räsänen. *Materialien zur Lautgeschichte der türkischen Sprachen*. Helsinki 1949)を行なうことができるような学者はドミトリエフの死後は少ないのではないかと思われる（セヴォルチャンやバスカコフの名をあ

げることができるかも知れない), 丁度, ソ連の蒙古学について, そのような総括的研究が出来たきわめて少数の学者の1人ポッペ教授(レニングラード)がアメリカに去った後, 総括的研究の可能な学者の欠除が痛感されているのに似ている。(ウラジーミルツォフの霊に捧げられた論文集「蒙古諸民族言語・歴史研究」Академия Наук СССР. Институт Востоковедения. Филология и история монгольских народов. М. 1958. を見てもそれがわかる。) ドミトリエフ亡き後のソ連トルコ学界には一抹の淋しさが感ぜられる。

また古代語の研究においてもドイツのガバインが「古代トルコ語文法」(A. von Gabain. Alttürkische Grammatik². Leipzig 1950) で行ったような根本的な, 分析的な研究のできる学者はソ連において少ないのではないかと思われる。マールロフはガバインと同じくらい(否, それ以上の)材料をもちながら, 材料の分析, 整理において徹底性が示されていないのは残念である(もっとも, ガバインの「古代トルコ語文法」に付されている語彙とマールロフの「古代トルコ語記録」に付されている語彙とを比較して見ると, 前者がそれぞれの単語の出典を示さないのに, 後者がそれを示しているのは大きな長所であり, また語彙の数も多く, 例えば古代トルコ語 *oq* 「まさに」がガバインに欠け, マールロフに挙げてあるのも優れた点である)。

最後に, ロシア・ソ連トルコ学と西欧のそれとを簡単に比較して見よう。

かつて, 精力的に研究を発表したラドロフにおいてロシア・トルコ学が世界のトルコ学界のトップに立つように見えたとき, デンマルクのトムセンは, 突厥碑文解説およびその後の研究によって, ロシアがトルコ学の独壇場でないことを示した。またトゥルフアン遠征隊がドイツにもたらした多数の古代トルコ文書は, トルコ学の中心をドイツに移したかの観があった。しかし西欧のトルコ学は, 西欧にトルコ人が住んでいず, トルコ民族の主なる集団が殆んど全部住んでいる唯一の国がロシア(ソ連)であるという簡単な事実によって, 現代語の研究においてロシア(ソ連)の学者とたち向うことはできなかったし, 今もできない。西欧の学者の強みは分析力の鋭さにあるが, こと現代語に関する限り, 多くの場合, ロシア学者の蒐集した資料にたよらざるを得ない。他方, ソ連学者の強みは材料と直結している点にあるが, 分析力の鋭さとか広い視野の点で, 今後の努力にまつべきものが少なくないように思われる。ここに一例をあげておこう。古代トルコ語動詞 *qaran-sür-a* 「皇帝が無くなる」, *är-sir-ä* 「種族同盟が無くなる」について, ドミトリエフは, 「メリオランスキーの推定によると(この推定は後にバングおよびレセネンによって発展されたのであるが) privativ-suffix *-süz//siz* を持つ幹からつくられたもので, *qaran-süz* 『皇帝無し』, *al-süz* 『種族同盟無し』に最も近い」とのべ, 同じ機能をもつチュワン語の接尾辞 *-sär//sër* と比較するとどまる(Н. К. Дмитриев. Соотношение р/з. АН СССР. Исследования по сравнительной гр. тюркских языков. Л.- М. 1955, стр. 325)。しかるに, フィンランドのラムステトはアルタイ比較言語学概論Ⅱ(ヘルシンキ1952年)224頁で, トルコ諸語の *-süz∞siz* をチュワン語の *-sär∞sër* と比較するとどまらず, 元朝秘史蒙古語の接尾辞 *-müser* < *-mü-ser* (*ölmüser* 「飢えることなく」, *keyisümüser* 「風に吹かれることなく」, 秘史 § 56) と比較し, 蒙古語の *-sar*, ツングース系ゴールド語の *-sar* とともに比較している。このように広い視野こそ, この

問題の考察にはまさに要求されるのである。

またソ連の学者において目につくことは（西欧の学者に全く見られないことであるが）時勢に同調しすぎるということである。マルのヤフェット言語学の盛んな頃は、サモイロウィチのような優れたトルコ学者ですら、トルコ語の諸事実をマル理論に適合させようとした（А. Н. Самойлович. Туркология и новое учение о языке. «АН СССР. XLV Академику Н. Я. Марру. М.-Л. 1935. стр. 113-120）。スターリンがマルを批判した論文「言語学におけるマルクス主義について」（1950年）を発表し、その中で、「その重大な欠陥にも拘わらず」比較的・歴史的方法がマルの4要素分析（世界のあらゆる言語のあらゆる単語を sal, ber, yon, rosh という4つの音節=要素で説明しようとする試み）より良いとのべると、だれもが「比較的・歴史的方法」をふりまわした。そしてスターリンが死去して、しばらくするとだれ1人スターリンを引用する学者がいない。このような時勢同調の雰囲気は優れた方法論の仕上げに有害でないことを希望せざるを得ない。

ベートリンク、ラドロフ、メリオランスキーのような規模のソヴィエト・トルコ学者が出現することをわれわれは期待する。